

地域の仕事 が認知症、 元気シニア たちの居場所 になる

独立行政法人福祉医療機構(WAM)が行う社会福祉振興助成事業(WAM助成)は、国庫補助金や寄付金を財源とし、高齢者・障害者などが地域のつながりのなかで自立した生活を送れるよう、NPOやボランティア団体などが行う民間の創意工夫ある活動などに対し、助成を行っています。今号では、WAM助成を活用した特定非営利活動法人市民社会サポートやまがたの取り組みを紹介します。

中間支援組織として 持続可能な市民活動をサポート

令和3年に設立された特定非営利活動法人市民社会サポートやまがたは、山形県を拠点に市民やNPO、企業、行政など、多様な主体が協働しながら地域課題に取り組める社会の実現を目指している。「つなぐ、支える、とものつくる」という理念のもと、「人と人」、「地域と社会」をつなぐ中間支援組織として地域の持続可能な市民活動をサポートしている。

活動拠点の山形県について、代表理事の石山由美子氏は次のように説明する。

「山形県は、全国でも人口減少と高齢化が進んでおり、地域課題が複雑化・多様化して

います。高齢化に伴う支援の担い手不足によりNPO活動や地域コミュニティが果たしてきた機能が低下し、今後は行政サービスの低下も懸念されています。県内には約430団体のNPOがありますが、その約2割は活動を休止した状況にあります。NPOは地域課題の担い手として行政の計画に組み込まれていますが、委託事業などの事業系NPOが7割を占め、新しい事業への取り組みが少ないことも課題となっています」。

現在の主な活動としては、NPOの設立・運営に関する相談対応やサポート、組織基盤強化のための研修や情報提供、地域での協働を促進するネットワークづくりなどを実施している。

ネットワークづくりでは、さまざまな分野のNPOや行政が集まり、行政の取り組みや一緒に取り組みたいことなどについて意見交換や情報共有を行う円卓会議を開催している。

認知症の人の「生きがい」、 「つながり」を支える

同法人は、令和6年度のWAM助成を活用

一言

WAMから

地域の団体に対して誠心誠意対応されている事業姿勢や、事業意欲に溢れる運営姿勢を評価しています。社会福祉協議会や地元の企業とつながりを持ち、とくに認知症の方のニーズを適切に捉え「生きがい」、「居場所」を提供されました。団体内において担当者・関係機関ごとに役割分担の細分化ができており、それぞれのスキルを有効活用して持続可能な事業体制が構築されたことで、効率的に運営された点も高く評価できます。全国でも類を見ない先駆的な事業であることから、モデルケースとなることを大いに期待しています。

し、「認知症の人と社会がつながる事業」を実施した。

同事業は、地域で暮らす認知症の人や元気シニアが生きがいをもち、地域に貢献できる「出番」と「居場所」を創出することを目的に、①認知症の人を含む地域で生きづらさを抱えている人の生きがいの場づくり、②作業所での活動、③理解の促進・情報発信を行った。

「高齢化や人口減少とともに、認知症高齢者の増加は深刻な状況にあり、地域で暮らし続けるためには、本人の『生きがい』や『つながり』を支える仕組みづくりが不可欠でした。そのようななか、常設型の高齢者の居場所をはじめ、配食サービスや生活支援を実施している特定非営利活動法人ふれあいにこの丘から、『利用者が仕事を通じて社会と



つながりを生み、生きがいをもって活動できる場を提供したい」という相談を受けました。このような場を創出するため、WAM助成ではNPOや山形市社会福祉協議会、企業と連携し、認知症や元気シニアの人たちが地域に貢献できる就労体験の機会を提供し、労働の対価を得られる仕組みをつくることにより、人とのつながりや生きがいをもちながら、誰もが自分らしく暮らせる地域づくりに取り組ましました」（石山代表理事）。

具体的には、社協から紹介された電気工事会社と連携し、廃棄電線から銅線を取り出す再資源化の作業を通じて、参加者の生きがいや自己肯定感を高めることを目指した。支援対象は、認知症の人や元気シニアのほか、社協からひきこもりの人たちの活動と一緒に活動しないかと提案を受け、社協に登録するひきこもりの人のうち、就労体験を希望する人と活動した。

「事業の周知方法としては、案内チラシを配布したほか、地域包括支援センター等協議会やおれんじサポートチーム（認知症初期集中支援チーム）、認知症カフェなどに事業説明を行い、家族の同意を得られた認知症当事者を紹介していただきました。また、元気シニアに

ついては、『ふれあいにこにこの丘』の利用者や支援活動に携わるボランティアの高齢者を中心に、認知症への理解があり、支えあうことが当たり前という認識をもつ人たちが参加しています」（石山代表理事）。

多様な主体が協働して 就労の機会を提供

作業の内容としては、元気シニアとひきこ

もり当事者が企業に出勤し、長い廃棄電線をカット



企業では、元気シニアやひきこもりの人が電線のカットや特注の機械を使用して電線の被膜を剥く作業を担った

剥いた電線を「にこにこの丘」へ運搬するのも元気シニアが担当



令和6年度事業

特定非営利活動法人 市民社会サポートやまがた

認知症の人と社会がつながる事業

事業概要

助成額

206万8千円



WAM助成
e-ライブラリー

【事業概要】

認知症や元気シニア、ひきこもりの人たちが生きがいを持ち、自分らしく暮らせる地域社会の実現を目指し、市民や支援機関、企業と協働しながら就労体験の機会と居場所を提供する事業



【実施内容】

- ◆ 認知症の人を含む地域で生きづらさを抱えている人の生きがいの場づくり
認知症や元気シニア、ひきこもりの人たちが、仕事を通じて役割と出番をもつことのできる居場所を創出
- ◆ 作業所での活動
廃棄電線の再資源化の作業を通して、人とつながりながら生きがいや自己肯定感の向上を図る



- ◆ 理解の促進・情報発信
支援の担い手が不足するなか、認知症やボランティア活動への理解を深める勉強会を開催

【成果】

- ◆ 支援実績としては、企業での電線カット作業は28回、「にこにこふれあいの丘」での銅線取り出し作業は20回実施し、認知症当事者5人、元気シニア11人、ひきこもり当事者5人が参加した
- ◆ NPOや社協、企業、中間支援組織など多様な主体が連携し、相互補完的な役割を果たすことで、安心して働ける場を提供するとともに、労働への対価が得られる仕組みをつくることのできた
- ◆ 参加者へのアンケート調査では、参加者全員が「活動を通じて人とのつながりを感じた」と回答し、「やりがいを感じた」、「自信がついた」など、精神的な充足感や自己肯定感の向上につながったことがうかがえた
- ◆ 事業の反響として、地元新聞紙に活動が取り上げられたほか、同様の取り組みを考える自治体や支援団体からの視察や見学が相次ぐなど、高い関心が寄せられている



し、特注の機械を用いてカットした電線の被膜を剥く作業を実施。その後、剥いた電線を「ふれあいにこにこの丘」に運搬し、認知症当事者と元気シニアが手作業で電線から銅線を取り出す作業を担った。取り出した銅線は企業に納品し、参加者には労働の対価として1日500円を支払うこととなっている。連携団体の役割分担として、市民社会サポートやまがたはスケジュール管理や作業工程の調整、担当者の配置など事業全体のコーデ



インターネットを担い、「ふれあいにこにこの丘」は居場所の提供や認知症・元気シニアへの活動サポート、送迎支援など、社協はひきこもり当事者の調整と企業内での活動サポートを行った。

参加者に寄り添いながら活動をサポート

作業所での活動について、事業事務局リーダーの金子陽子氏は次のように説明する。

「企業での活動では、専門的な機械を使用するため、企業の社員に指導してもらいながら、参加者が2人1組となり作業をしてもらいました。また、『ふれあいにこにこの丘』での活動では、荒井智子理事長と私がコーディネーターとして入り、参加者に寄り添いながら活動をサポートしました。作業自体は難し



「ふれあいにこにこの丘」で、認知症の人や元気シニアが電線から銅線を取り出す作業を行う様子



2回開催したボランティアの勉強会には延べ30人が参加した。ボランティア活動や認知症への理解を深め、支援の担い手を育成することを目指した

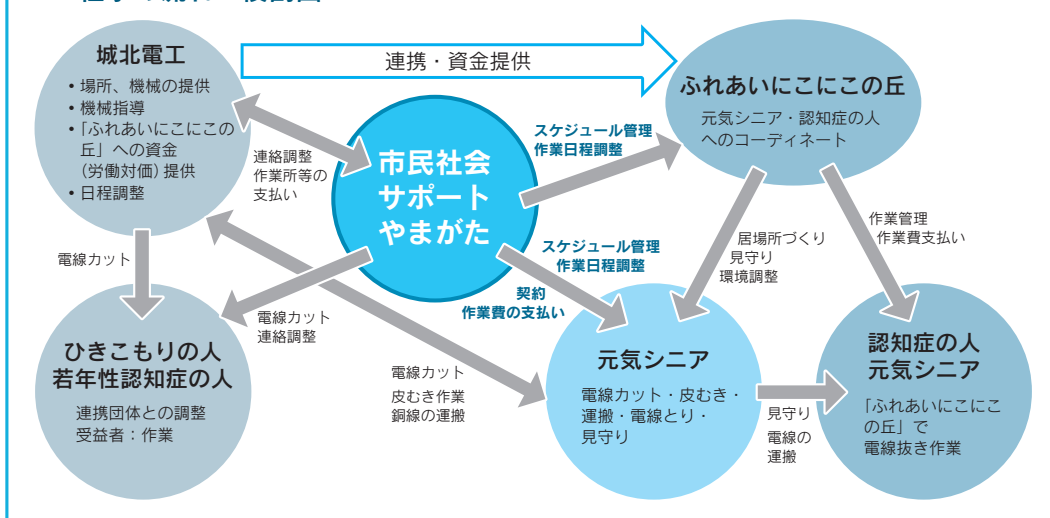
くないため、認知症の人と元気シニアが会話を楽しみながら作業することができました。活動後には参加者から感想をいただき、困りごとや作業環境への要望があれば、すぐに対応して作業しやすい環境をつくっています」。

支援実績として、企業での電線カット作業は28回、「ふれあいにこにこの丘」での銅線取り出し作業は20回実施し、認知症当事者5人、元気シニア11人、ひきこもり当事者5人が参加した。

「『ふれあいにこにこの丘』での活動では、オンラインサポートチームから紹介された若年性認知症の人が中心となってくれたのですが、その方はこだわりが強く、自分の好きなことをずっと話している特性があり、ほかの居場所では迷惑行為と受け取られたこともあったそうです。『ふれあいにこにこの丘』では、周りの参加者が優しく受け入れるというよ

り、その人の話を聞くことをみんなが楽しみにしており、にぎやかで楽しい雰囲気の中なかで作業に取り組むことができました。その要因として元気シニアの人たちが認知症への偏見がなく、普通に接する土壌があったことが大きいと思います。一方、企業での活動では、社協の職員がひきこもり当事者の調整やサポートをしていましたが、なかなか折り合いがつかず、結果的に継続的に参加してもら

▼仕事の流れ・役割図



認知症やボランティアへの理解を深める

うことが難しく、元気シニアたちが中心に活動することが多くなりました」（金子氏）。

そのほかにも、助成事業では、認知症やボ



この著作物は著作権法、国際条約およびその他の知的財産権に関する法律や条約によって保護されています。著作権者（独立行政法人福祉医療機構）ならびに著作権者の許可を得ない複製（コピー）、再配布を、固くお断りいたします。

助成事業の成果としては、多様な主体が連携し、相互補完的な役割を果たすことで認知症の人や元気シニアたちが役割や生きがいをもちながら、安心して働ける場を提供するこ

多様な主体が協働する モデルケースに

また、参加者に実施したアンケート調査では、全員が「参加してよかった」と回答し、「人とのつながりを実感した」、「やりがいを感じた」、「自信がついた」などの声が多く寄せられ、自己肯定感の向上につながっていることがうかがえたという。

家族が初めからできないとあきらめていたり、周りに迷惑をかけたくないと難色を示されたりするケースがありました。支援に関わる人だけでなく、認知症の人でもできることがたくさんあり、生きがいの創出により認知症の進行を遅らせる可能性があることを広く伝えていく必要があると感じています」（石山代表理事）。

ランティアへの理解を深めるための勉強会を2回開催し、延べ30人が参加した。「勉強会では、ボランティア基礎講座と傾聴講座を実施し、支援の担い手を増やすことに取り組みました。今回の事業にあたっては、認知症の人は意思決定が難しいことから、家族の意向を確認して同意を得られた方に参加していただきましたが、



左から特定非営利活動法人市民社会サポートやまがた 事業事務局リーダー 金子陽子氏
特定非営利活動法人ふれあいこにこの丘理事長 荒井智子氏

企業や行政との連携を強化

特定非営利活動法人市民社会サポートやまがた
代表理事 石山 由美子氏



本事業を通じて、最も重要な役割を果たしたのはコーディネーターです。企業、NPO、社協、認知症当事者・家族など、多様な関係者の調整を担うコーディネーターを配置していなければ、日程調整や支援体制の構築、安全な作業サポートなどを実現することは

難しくなると考えます。人件費に活用できる助成金が少ないなか、WAM助成ではコーディネーターの人件費に充てられたことは本当に助かりました。

今後は、事業の継続に向け、本事業で得たプロトタイプをモデル化し、企業と連携を図るとともに、行政との協働による事業委託化を目指していきたいと思

の作成などの事務業務を苦手とするNPOが多いなか、当法人のような中間支援組織がその役割を担い、NPOには現場の活動に集中してもらうことにより、事業を効率的かつ効果的に実施するモデルケースになりました。今後、さらに人口減少が進み、NPOや支援団体の担い手が不足することが想定されるなか、『コレクティブインパクト』とし

とができた。「事業を通して認知症の人でも地域の理解や協力があれば、社会のなかで生きがいをもって生活することが可能であることを実証することができ、少しでも労働の対価が得られる仕組みをつくれたことは成果となりました。また、助成金の申請や会計・経理、報告書

で多様な主体が協働しながら、互いの得意なことを活かし、地域課題に取り組んでいくことが大切になると思います」（石山代表理事）。
事業の反響として、地元新聞に活動が取り上げられたほか、行政や支援団体から視察や問い合わせがあり、事業への高い関心が寄せられたという。
地域課題の解決に向け、多様な主体をつなぎながら持続可能な活動をサポートする同法人の活動が全国に広がることを期待される。

◆団体概要

〒990-2402
山形市小立三丁目8-39-10
TEL: 090-7790-9084
FAX: 023-685-8388
URL: <https://www.sapoyama.com/>
設立: 令和3年11月
代表理事: 石山 由美子



社会福祉振興助成事業に関するお問い合わせ

●NPO リソースセンター

NPO 支援課（助成事業の相談・募集、NPOの融資相談等）
TEL: 03-3438-4756 FAX: 03-3438-0218 (共通)

NPO 振興課（助成事業の広報、事業評価等）
TEL: 03-3438-9942 FAX: 03-3438-0218 (共通)

NPO等の民間福祉活動への
応援よろしくをお願いします！

当機構では
寄付金を募集
しています



お問合せ先: 03-3438-0211 (総務部総務課)

